

美術科教育学会通信

No.85 2014.2.18

□巻頭言 □第36回美術科教育学会奈良大会プレ学会<研究発表会 in Nara>報告 □第36回美術科教育学会奈良大会最終案内 □第9回世界ファブラボ会議参加報告 □研究ノート(美術教育史研究部会より) □新刊紹介 □本部事務局より

巻頭言

美術教育学の研究者に求められること

副代表理事 山木朝彦(鳴門教育大学)

1. 理論の背景

美術教育の基礎論ともいえる、チゼック、リード、ローウェンフェルド、そして、アイスナーなどの考えを学部学生や大学院生に伝える機会がよくあります。そのような折りには、できるだけ新鮮な目でこれら先人が成し遂げた業績を振り返りみるように努めます。

チゼックは児童画の発見者であり、リードは芸術による教育の提唱者であり、ローウェンフェルドは創造主義的な美術教育の推進者であり、アイスナーは本質主義(エッセンシャルイズム)の立場から系統的なカリキュラムを開発したと伝えるだけでは面白くありません。

もちろん、そのことを丁寧に伝えることは、何にもまして重要なのですが、それだけにとどまっていたら、なんだか教育史の小事典のようで、面白くないのです。

そこで、彼らの人生の歩みを知っている範囲で伝えます。

ハーバート・リードについては詳細な自伝もあれば、これを検証したり、批判する傍証的な研究書もあります。ローウェンフェルドも、*Journal of Art Education* の追悼特集号や UMI から入手できるアメリカの学位論文のなかに、伝記的記述を含む研究がありますので、いくつかの逸話や経歴から人物のイメージをつくりあげ、伝えることができます。チゼックについては、石崎和宏先生のご研究や「こどもの城」が1990年に発行した「美術教育のパイオニア フランツ・チゼック展」図録に掲載されているチゼック自身の言葉から、その生い立ちや開かれた性格を描き出すことができます。アイスナーもまた、*What the Arts Taught Me*

About Education というエッセイ (*The Kind of School We Need*, 1998 所収) のなかで、自分の生い立ちを包み隠さず述べています。

これらの文献をもとに顔写真を映写し、彼らの交友関係や師弟関係も指し示します。このことで、俄然、冷たい理論は人間が創り出した温もりのある思想に姿を変えます。

このように手間暇かけた、ある意味で能率の悪い伝達手法を私が採っているのには、わけがあります。

美術教育の実践史や理論史という枠組みのなかで、彼らの打ち立てた業績は、燦然と輝くエポック・メイキングな不滅の刻印ともいえるものです。しかし、同時に、美術教育という「枠組み」もしくは「文脈」のなかにアウトプットされた彼らの業績を取り上げることは、その業績を産み出すまでの産出の過程を見失うことにもなりかねません。

彼らを美術教育に寄与した大いなる実践者・研究者として敬うならば、当然、その試行錯誤の歩みや理論や実践の背後にある蓄積された経験の厚み、とりわけ芸術とのかかわりに目を向けるべきだと思うのです。

一例を言えば、渡米前のローウェンフェルドが描いていた油彩画をジャーナルの写真図版で知ったとき、ひょろ長く伸ばされた人物表現のなかに、彼の表現主義的な芸術運動への没頭ぶりが垣間見える思いがしました。

おそらく、そのような表現手法と触覚型というアイディアの間には緊密な関係があります。このように、人物像のイメージを鮮明にする努力は、彼らの著作や論文を美術教育研究というコンテキストに沿って読み解くだけでは得られないある

種の洞察を私たちにもたらししてくれます。

2. 権威を鵜呑みにしないこと＝研究者の構え

かつて、ローウェンフェルドの視覚型・触覚型という分類に関心を抱いたことがあります。

いまからすでに30年以上も昔、まだ大分大学で講師をしていた頃、私が入手できる美術教育にかかわる理論書と呼ばれる類いの書籍（和書）には、必ずといって良いほど、この視覚型と触覚型の分類についての記述がありました。

当然のように興味を抱いたわけですが、どの本も、その分類を立証され確立された理論のように扱っていて、著者自身の疑義や追実験の必要性などは何一つ述べられていません。

ローウェンフェルドの著書である『美術による人間形成』やその原著 *Creative and Mental Growth* にあたってみても、視覚型と触覚型の定義や特性についての記述はふんだんに盛り込まれているものの、分類のための実験についての具体的な手続きについての記載が省かれています。

もちろん、ご存じのように、ヴィクター・ローウェンフェルドには、心理学の素養がありますから、単に経験知から、人間には二つのタイプがあって、触覚型と視覚型であるなどと、軽々しく恣意的に分類しているはずはないのです。

その確認は簡単にできました。前掲和訳書の632頁にアメリカ心理学会誌に投稿・掲載された論文題目が載っています。なにぶん古い文献ですし、現在のように論文アーカイブの検索システムが整備されていない時代でしたので、図書館司書の協力の元に苦労して入手し、読んでみました。

取り寄せた論文には、ローウェンフェルドが考案したいくつかの弁別テストが図入りで掲載され、最初の段階の仮説には、抽象型というアイテムもあったことがわかりました。さらに、この論文においては、表現スタイルとしての触覚型・視覚型ではなく、指先などの触知による知覚および認知の次元の弁別のみが取り上げられていることもわかりました。

この経験を通じて、私には今もって一つの疑問が残っています。それは、ローウェンフェルドの視覚型・触覚型を紹介し、また、学ぶべき理論として取り上げていた日本の研究者たちは、この分類がいかなる方法を前提に導き出されたものなのか知っていたのかどうかということです。

これと似たようなことは、今もたくさん起きているのではないのでしょうか。権威ある研究者が述べた学説は、そのディテールを確かめないまま信じてしまう。あるいは、あたかも自分でも納得したごとき風情でそれを講じてしまう。そういう安易な姿勢が完全に払拭されたとは言えないでしょう。

これを避けるには、権威ある者が後押ししているからといって鵜呑みにすることなく、自分自身でその現物となる論文や教材・教具や映像を収集し、多角的な観点から分析や批

評や判断を行い、必要ならば実験を行い、複数の研究者と意見を交わして、その価値を論ずるという方法しかありません。

そして、もう一つ、この場を借りて述べておきたいことがあります。

矛盾するようですが、冒頭に述べた「チゼックは児童画の発見者であり、リードは芸術による教育の提唱者であり、ローウェンフェルドは創造主義的な・・・」という、美術教育における「コンテクストづくり」の意識が物事の本質を覆い隠してしまうのではないかと私は考えます。ある研究者や運動の性格を単純に名付け、安心してしまう愚に陥りたくないと思うのです。

紙幅の関係から示唆のみですが、たとえば、「装飾形態学」の授業などで見せた、同時代の美術運動を積極的に取り入れるチゼックの姿勢、ローウェンフェルドの掲げるカリキュラムが志向する社会変革のためのデザイン重視の姿勢、DBAEの題材例集に掲載されている多文化主義的な数多くの題材などは、そのようなコンテクストづくりから零れ落ちた宝玉のような輝きを発しているように思えてなりません。

第36回 美術科教育学会 奈良大会 記念プレ学会 <研究発表会 in Nara> 2013.12.21 報告 テーマ：美術教育における「遊び」概念と指導

—遊びと学び、内発的動機づけ、造形の基本、芸術概念の拡張、共通事項—

宇田秀士(コーディネーター, 奈良教育大学)

平成 25(2013)年 12月 21日(土)のプレ学会当日は、年末の慌ただしい時期にもかかわらず、全国各地から約 90名の参加者を得て、「美術教育における「遊び」概念と指導—遊びと学び、内発的動機づけ、造形の基本、芸術概念の拡張、共通事項—」のテーマの下、活発な発表・討議をいたしました。皆様、ご参集ありがとうございました。

概要

1, 日時 2013年12月21日(土)午後12:30～17:30

2, 会場 奈良教育大学 附属教育実践総合センター
多目的ホール(35年前の学会“発祥の地”での開催)

3, 内容

○開会の挨拶 花篤 實氏(大阪教育大学名誉教授)

○第I部 発表とインタビュー

・12:45-13:05 全体の趣旨説明, 乾 一雄氏(1920-1992)の「遊び」を活かした美術教育構想と実践の特徴 宇田 秀士(奈良教育大学)

・13:10-13:45 乾一雄先生の美術教育に学ぶ 黒岩 和子氏(元大阪国際大学短期大学部教授, 元大阪市立金塚小学校校長)

○第II部 [研究発表会]と[討議会]

・14:15-14:35 小学校の現場から「見て!」と言える造形活動をめざして 團上 哲氏(奈良県北葛城郡河合町立河合第二小学校教諭)

・14:50-15:10 中学校の現場から 創造性を育む中学校美術科教育の形を探る—ランドアートを通じて— 長友 紀子氏(奈良教育大学附属中学校教諭)

・15:25-15:45 [共通事項]を考える 水島 尚喜氏(聖心女子大学 教授)

・16:05-17:20 発表に対する質問・意見交換と参加者全体での討議会

○指定質問者・討論者 佐藤 賢司氏(大阪教育大学 准教授), 阪口 信哉氏(奈良県葛城市立磐城小学校 教頭), 西尾 正寛氏(畿央大学 教授)

○17:20-17:30 閉会挨拶 熊野 恵次氏(奈良県斑鳩西幼稚園 園長・前奈岡美研会長), 本大会広報

○プレ学会運営委員会委員 永守 基樹(和歌山大学), 丁子 かおる(和歌山大学), 竹内 晋平(奈良教育大学)

第I部では、宇田がテーマの趣旨説明と乾氏の御業績にふれた発表をした後、氏の薫陶を受け独自の実践を長年行なってきた黒岩氏が発表されました。黒岩氏は、乾実践の集大成とも言える大阪市立大開小学校の研究同人でしたが、大開小の実態とその後の自らの実践について、指導作品や活動を掲示し、具体像を示されました。また、乾氏をよく知る花篤氏がその実践の歴史的意味や課題を語られ、その構想の厚みを感じました。

第II部の團上氏の発表では、氏の30年近くの小学校実践での試行錯誤が作品や活動例をふまえて示され、最終的に子ども自らが「見て!」と言える造形活動をめざしていることが十分に伝わってきました。また長友氏の中学校の実践では、ランドアートを題材化するという意欲的な実践が語られ、活動や評価の工夫などが語られました。お二人ともに小中それぞれの時期に特有の「遊び」概念を活かしていると感じました。また、水島氏は、学習指導要領に新設された「共通事項」は、美術教育における「遊びと学び」にどう活かしたらよいのか、その基盤となる考え方も含めて発表いただきました。

最後は、発表者、指定質問者・討論者、フロアー参加者を変えて討論の場を持ちました。中でも、共通事項に対する様々な想いや願いを発信いただきました。この熱源を活かし継続した討議の場を設けていく必要性を感じました。

なお、当日販売配布しました『概要集/発表資料集』(全80頁, 500円)の残部があります。購入希望の方は、以下までメールでお知らせ下さい。

メール: udah@nara-edu.ac.jp



討議会での発表者、指定質問者・討論者

第36回 美術科教育学会 奈良大会 最終案内 2014.3.28-30

32年ぶりの奈良の地での開催，ようこそ“学会発祥の地”へ

100件を超える発表・企画（一般発表90件，研究部会発表8件，シンポジウム1件，プラチナ・トーク〈特別招待発表〉4件）でおもてなし

宇田秀士(奈良大会実行委員長，奈良教育大学)

竹内晋平(実行副委員長，奈良教育大学)

第36回美術科教育学会奈良大会の最終案内ができましたのでお知らせいたします。なお最新・直前情報は，美術科教育学会 web サイト (<http://www.artedu.jp/>) にて掲載していきます。随時，ご確認確認下さい。

- 主催：美術科教育学会
- 後援：奈良県教育委員会
- 会期：2014年3月28日(金)，29日(土)，30日(日)
- 会場：奈良教育大学(〒630-8528 奈良市高畑町)
- 大会テーマ：美術教育における〈言葉・コミュニケーション〉—アートと言葉，言語活動の充実，鑑賞と表現，遊びと学び，共通事項—

御陰様で，3日間で90件の一般発表の申し込みをいただきました。年度末のお忙しい時期に，日頃の研究・実践成果をもって奈良に集っていただく会員の皆様にもまず御礼申し上げます。一般発表は，学会の生命線であり，地道な個々の研究の積み上げこそ，斯界が次のステージに進むパワーとなると考えています。それぞれ，存分にご発表下さい。

大会テーマは，学習指導要領における「各教科等における言語活動の充実」や美術やアートの活動がもつ独自の言葉・コミュニケーションについて考える機会にしたいと思い，設定致しました。また，昨年12月21日に開催した記念プレ学会にて熱く議論をした「美術教育における遊びと学び，共通事項」なども絡めていきたいと考えています。



2013.12.21 約90名の参加者で討議したプレ学会

このテーマの下，佐藤 学氏(学習院大学教授/東京大学名誉教授)，西井 恵美子氏(和歌山市立雄湊小学校教諭)，西澤 明氏(金沢大学属中学校教諭)をシンポジストとして，藤江 充氏(愛知教育大学名誉教授/学会元代表理事)を指定討論者として，それぞれお迎えし，29日にシンポジウムを企画致しました。小中における教育実践発表を軸に佐藤氏の提言を交え，多角的な討論を展開していく予定です。コーディネーターは，本学の竹内晋平が務めます。

さらに，プラチナ・トーク〈特別招待発表〉として，一般発表とは別な枠組みで，本学会に長年，携わってこられた4氏から貴重なメッセージをいただきます。

創設メンバーである那賀貞彦氏(大阪教育大学名誉教授 28日午後)には，本学会への激励も含めた「美術教育の戦略」を，同じく初回からのメンバー東山明氏(神戸大学名誉教授 29日午後)には，長年の研究の一端である「子どもの絵の表現の発達の道筋」を，それぞれ発表いただきます。また，元代表理事の宮脇理氏(Independent Scholar/元・筑波大学教授 29日午前)には，「芸術(美術・工芸)教育は人口に膾炙されているか」と題し斯界に対するメッセージを，同じく代表理事経験者の花篤實氏(大阪教育大学名誉教授 30日午前)には，草創期の本学会運営のご苦労や大学院創設の頃の試行錯誤について，それぞれ伺います。ご期待下さい。

研究部会発表(28日と30日)では，7つの部会全てと現在設立準備中の部会のあわせて8つの発表があります。一般発表で追究しきれない萌芽的・横断的なテーマについての発表と討議をお楽しみ下さい。

このように100件を超える発表・企画でおもてなしをさせていただきます。日頃の慌ただしい生活を離れ，非日常的な時空間の中で，美術と教育の日頃の活動や未来について思い切り語り合っていたいただければ幸いです。

(宇田)

■日程

大会第1日 3月28日(金)

学会誌編集委員会 10:30～12:30

受付 12:10-12:50

研究部会交流会 13:00～14:30

[授業研究部会, 現代<A/E>部会, アートセラピー研究部会, 高校美術研究部会]

研究発表I(プラチナ・トーク含む) 14:40～17:30

理事会(理事・監事) 17:50～19:50

大会第2日 3月29日(土)

開会式・総会(大講義室) 9:00～10:10

研究発表II(プラチナ・トーク含む) 10:25～12:05

昼休み(大学食堂営業)

研究発表III 13:00～14:40

シンポジウム「美術科教育におけるコミュニケーション, ことば, 言語活動」(大学講堂) 15:00～17:40

懇親会(大学内学生会館・山田ホール) 18:00-20:30

大会第3日 3月30日(日)

研究発表IV(プラチナ・トーク含む) 9:00～11:15

研究部会交流会 11:25～12:55

[美術教育史研究部会, 工作・工芸領域部会, 乳・幼児研究部会, アート&ケア(仮称)部会設立準備会]

■3月29日開催のシンポジウムについて

「美術科教育におけるコミュニケーション, ことば, 言語活動」

平成20(2008)年3月の学習指導要領改訂告示に先立ち, 中央教育審議会から「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」が示されました(平成20年1月)。この答申においては, 本シンポジウムのテーマである「コミュニケーション」と「ことば」に関連して, 「各教科等における言語活動の充実, 今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点である」と述べられています。豊かな「言語活動」によって思考力・判断力・表現力の伸長を図り, 「生きる力」という理念にアプローチしようとする学習指導要領のもとで, 図画工作・美術科学習においても現在, 多くの学校現場で実践が進められています。

その一方で, 美術科教育ではこれまでから「コミュニケーション」と「ことば」を視覚的・身体的な問題として扱ってきた経緯があります。また, 「言語活動」を含めた「コミュニケーション」と「ことば」は本来, 美術科教育の学習活動を成り立たせるための重要な要素であるとも言えるのではないのでしょうか。このように「コミュニケーション」と「ことば」を広義に, そして不可欠なものとしてとらえてきた美術科教育の特性を再検討し, 言語活動との関連性について考察していく必要があると考えられます。

本シンポジウムでは, 学習指導要領に位置付けられている「言語活動」を念頭におきながらも, 美術科教育における「コミュニケーション」と「ことば」の意義について, 幅広い協議を進めていきたいと考えています。

(竹内)

シンポジスト: 佐藤 学氏(学習院大学教授)

三重大学助教授, 東京大学大学院教育学研究科教授などを経て現職。東京大学名誉教授。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。教育学博士。著書に『米国カリキュラム改造史研究』(東京大学出版会, 1990年), 『教育改革をデザインする』(岩波書店, 1990年), 『教師というアポリア』(世織書房, 1997年), 『子どもたちの想像力を育むアート教育の思想と実践』(東京大学出版会, 2003年), 『教師花伝書』(小学館, 2009年)など。

シンポジスト: 西井 恵美子氏(和歌山市立雄湊小学校教諭)

和歌山大学附属小学校などを経て現職。京都教育大学卒業。日本教育美術連盟研究会, 美術科教育学会等で造形遊びに関して発表。「芒・蒲を描く - 身体感覚を研ぎ澄ませいきいきとした線を生む - 」(『美術教育実践研究』No. 1, 和歌山大学美術教育研究会, 2012年), 「線のぼうけん - 線の魅力と可能性を感じる - 」(『形』No.299, 日本文教出版, 2013年)など。

シンポジスト: 西澤 明氏(金沢大学附属中学校教諭)

金沢市内公立中学校教諭を経て現職。金沢美術工芸大学大学院美術工芸研究科, 金沢大学大学院教育学研究科修了。金沢美術工芸大学非常勤講師。金沢21世紀美術館「ミュージアムエデュケーション21」, 美術科教育学会<フォーラム in 京都>等で美術館との連携活動に関して発表。金沢大学附属中学校の「言語活動」に着目した校内研究を研究主任として統括(2010-2011年)。

指定討論者: 藤江 充(愛知教育大学名誉教授)

三重大学助教授, 愛知教育大学教授などを経て, 愛知教育大学名誉教授。美術科教育学会元代表理事。東京藝術大学大学院美術研究科修了。中央教育審議会・芸術専門部会の専門委員などを歴任。論文に「美術教育のための「能力」観の研究」(『美術教育学』第28号, 2007), 「『思考力・判断力・表現力』と美術教育」(『教育美術』連載, 2011～12)など。著書に「子どもの絵の謎を解く」(明治図書, 2013)など。

コーディネーター/司会: 竹内 晋平(奈良教育大学准教授)

京都教育大学附属京都小学校教諭などを経て現職。論文に「『小学図画』論争と日本画的図画教育 - 京都府師範学校附属小学校刊行論文の考察を中心に」(『美術教育学』第31号, 2010年), 「造形活動における児童の感受を通じた芸術発信 I」(『大学美術教育学会誌』第44号, 2012年)など。

■参加申し込み方法【事前のお申込みが大変お得です】

参加申し込み及び参加費の払い込みは, 本学会通信84号発送時(2013.10)に同封させていただいた払込取扱票に必要事項をご記入の上, お振り込みください。参加費の振り込みによって学会参加申し込み手続きとさせていただきます。

参加費払い込み用の払込取扱票を紛失された方は, 郵便局にある払込取扱票をお使いください。口座番号, 加入者は以下の通りです。その際は, 必ず払込取扱票の通信欄に「参加費4,500円」「懇親会費3,500円」などを明記してください。通信欄に, ご住所, ご所属(大学院生の場合は, 「院生」と明記をお願いします), お名前, 電話番号等をご記入ください。

郵便振込

口座番号記号：00950 - 5 - 234123

加入者名：第36回美術科教育学会奈良大会

(1) 学会参加費：

①事前申込み料金 正会員：4,500円，大学院生（現職等の社会人をのぞく，正会員を含む。以下同様）：2,500円，大学院生以外の非会員：5,500円

②当日申込み料金 正会員：5,000円，大学院生：3,000円，大学院生以外の非会員：6,000円

(2) 懇親会費：

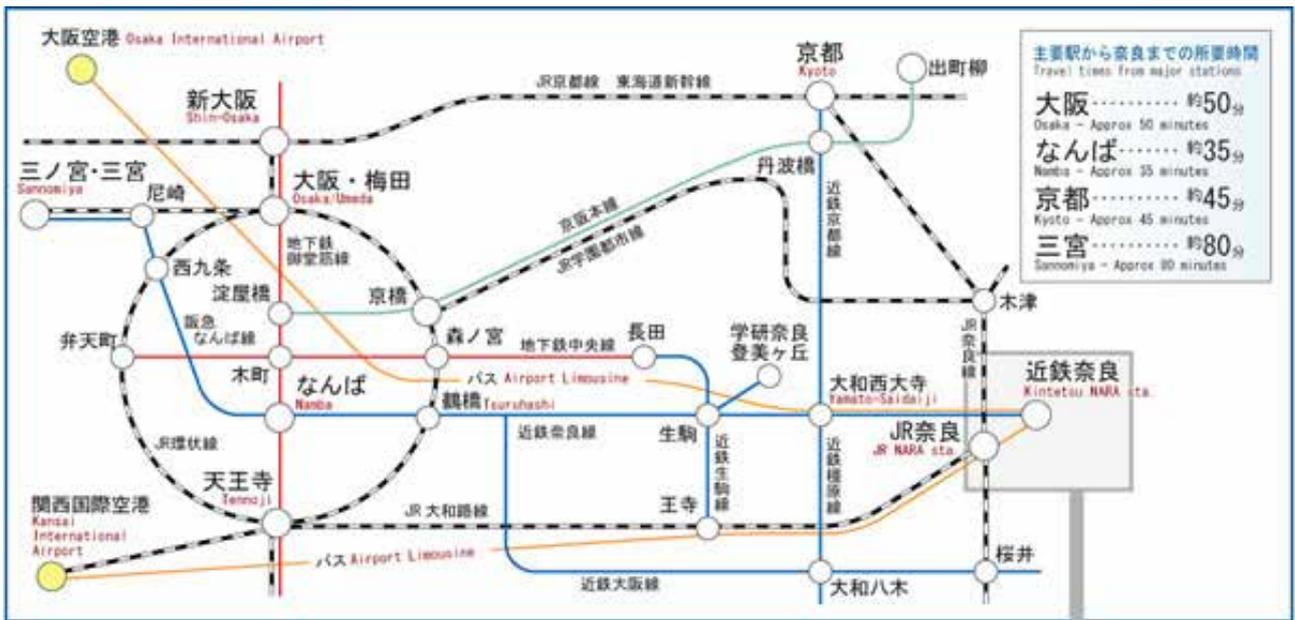
①事前申込み料金 3,500円（大学院生は，2,500円）

②当日申込み料金 4,000円（大学院生は，3,000円）

(3) 参加申し込み最終期限と参加費・懇親会費の払い込み最終期限：2014年2月28日（金）

・当日受付も可能ですが，大会運営上できるだけ事前申込みをお願いします。なお，参加申し込み最終期限の2月28日（金）以降は口座に振り込まず，当日受付（当日申込み料金，上記参照）にてお支払いください。

奈良教育大学までのアクセス



■奈良教育大学までの移動手段

◆主要駅からJ R奈良駅・近鉄奈良駅までの所要時間

大阪から約 50 分 (J R 線, 近鉄線)

なんばから約 35 分 (近鉄線)

京都から約 45 分 (J R 線, 近鉄線)

三宮から約 80 分 (J R 線, 阪神・近鉄線)

◆J R奈良駅から奈良教育大学まで

○奈良交通バス：2系統市内循環線(外回り), 56系統山村町行, 57系統藤原台行などに乗車, 高畑町(たかばたけちょう)で下車(約15分), バス停から徒歩1分。

○タクシー：所要時間約15分。

◆近鉄奈良駅から奈良教育大学まで

○奈良交通バス：2系統市内循環線(外回り), 6系統中循環線(外回り), 56系統山村町行, 57系統藤原台行などに乗車, 高畑町(たかばたけちょう)で下車(約10分), バス停から徒歩1分。

○タクシー：所要時間約10分。

◆バス停からから学会受付まで

正門を入ると正面に大学「講堂」が見えます。「講堂」を正面にして左手に進んで下さい。進んだ先のL1(講義棟), L2(講義棟)の入り口付近が大会受付場所となります。

■宿泊先

各自で手配をお願いします。

■託児について

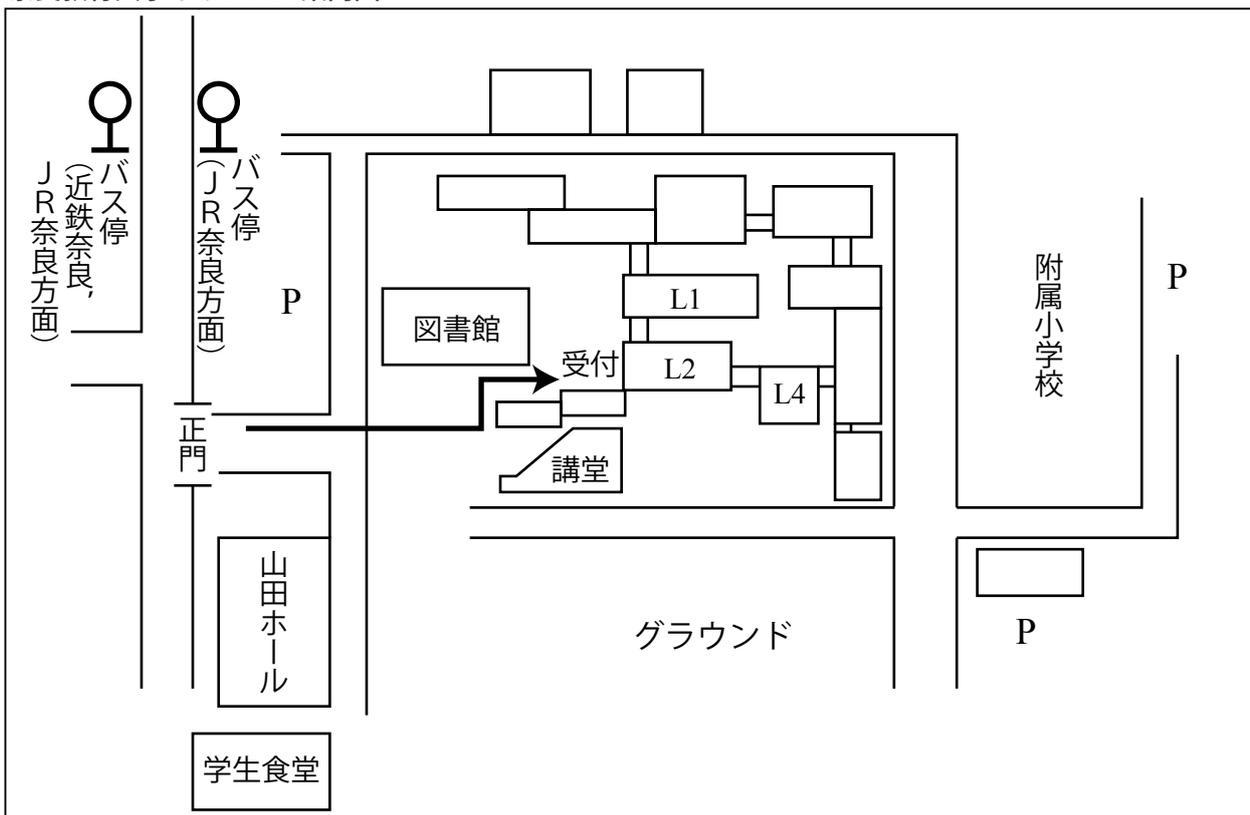
第36回美術科教育学会奈良大会では、託児の対応をしておりません。ご了承のほどお願いします。

問い合わせ先：第36回美術科教育学会奈良大会運営事務局
〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学
比留間 良介(大会名誉実行委員長)
宇田 秀士(大会実行委員長)
TEL/FAX 0742-27-9223(研究室直通)
E-mail udah@nara-edu.ac.jp
竹内 晋平(大会実行副委員長)
TEL/FAX 0742-27-9038(研究室直通)
E-mail shimpei@nara-edu.ac.jp



奈良教育大学「講堂」

奈良教育大学キャンパス案内図



受付 12:10~12:50

研究発表 I

	A会場(大講義室)	B会場(101講義室)	C会場(102講義室)	D会場(201講義室)	E会場(206講義室)	F会場(208講義室)
13:00 ~ 14:30	授業研究部会 実践を論文にするワークショップ	現代<A/E>部会 美術/教育において求められる創造性と人間像とは	アートセラピー研究部会 アートセラピーが美術教育に果たす役割と可能性	高校美術研究部会 高等学校「美術I」初回授業の教育的意義	/	/
	-	神野真吾 谷口幹也	栗山裕至	清田哲男		
14:40 ~ 15:10	図画工作科に対する教育観の相違と教員養成の果たす役割 ~現職教員対象の聞き取り調査をもとに~	『新定画帖』における手工科への転移に関する一考察	中学生の美術科に関する課題価値について I	デジタルの「つくる」を考える	英語による図画工作科の授業内容の一考察	/
	隅敦(富山大学)	平野英史(東京学芸大学/研究員)	花輪大輔(北海道教育大学)	浅野恵治(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)	藤井康子(大分大学)	
15:15 ~ 15:45	高校生の制作したデジタルイメージに関して -素材の質感化の観点から-	大学における普通教育としてのアート・エデュケーション 千葉アートネットワーク・プロジェクトの取り組みを事例として	玉ころがしの教材開発 -小学校での工作実践-	高等専門学校における美術教育の役割と授業改善の試み	版に表す題材の研究	地域と工芸文化に関する研究 -現代の赤穂緞通における伝承-
	足立元(日本文理大学)	神野真吾, 縣拓充(千葉大学)	宮崎藤吉(元 生駒市立生駒小学校)	上山輝(富山大学)	藤原逸樹(安田女子大学)	高嶋忍(奈良女子大学)
15:50 ~ 16:20	からだ・気づき・対話の アート教育 III p.00	アート・ワークショップの変容体験と相互浸透についての考察 p.00	オリジナルと二次創作の比較から美術批評の能力を育む方法論について -“鳴子こけし”をもとに- p.00	土粉あそびの実践報告 p.00	幼児期における造形活動と発達研究に関する検討 p.00	“ものづくりにある人づくり”(1) -燕市の伝統工芸「鍮起銅器」をもとに- p.00
	郡司明子(群馬大学)	笠原広一(福岡教育大学)	和田学(筑波大学)	江村和彦(名古屋経営短期大学)	金子優人(宇都宮大学大学院)	林筱蓉(上越教育大学)
16:25 ~ 16:55	子どもの絵における空間表現の発達と指導 ~「食事の風景」の絵を通して~	単元構成における「題材」概念の成立と変容過程の研究(2)	“身体性”に基づく作品との対話	乳幼児の描画と発達	視覚障害者のための触擦本について	絵画における美的感覚の発達について
	阿部宏行(北海道教育大学岩見沢校)	山田一美(東京学芸大学)	長井理佐(東京女子体育大学)	角地佳子(大阪国際大学短期大学部)	岩崎清(ギャラリーTOM)	平野友吏子, 前田基成(女子美術大学大学院美術研究科)
17:00 ~ 17:30	日本美術の諸様式の記述言語調査 -美術史記述コーパス及び学習者コーパスの構築・分析を通して-	プラチナ・トーク<特別招待発表> 美術教育の戦略はいかに可能か -連載に書かなかったこと-	国際バカロレア中等課程プログラムの改訂について	重度・重複障害児の造形活動に関するアクション・リサーチ	子どもたちの造形活動と地域をつなぐ試み -伝統的なモチーフを生かす-	/
	有田洋子(島根大学)	那賀貞彦(大阪教育大学名誉教授)	小池研二(横浜国立大学)	池田吏志(広島大学)	笹原浩仁(福岡教育大学)	

理事会 17:50~19:50

9:00~10:10 開会式・総会 A会場(大講義室)

研究発表Ⅱ

	A会場(大講義室)	B会場(101講義室)	C会場(102講義室)	D会場(201講義室)	E会場(206講義室)	F会場(208講義室)	G会場(209講義室)
10:25 ~ 10:55	グスタフ・クリムト作『死と生』の鑑賞(中学3年生)における、美的特性の感受と主題感受の調査研究 立原慶一(宮城教育大学)	鳥根県師範学校附属幼稚園保育科における図画教育 牧野由理(城西国際大学)	横浜山手中華学校とアジアの美術教育の展望 王節子(横浜山手中華学校教諭) 穴澤秀隆(NPO法人市民の芸術活動推進委員会理事) 宮脇理(Independent Scholar/元・筑波大学教授)	日本のODAにおける美術教育—現職教員派遣の有効性— 山田猛(東京学芸大学附属竹早中学校)	小規模美術館による社会教育活動の実践Ⅱ「赤崎水曜日郵便局」 楠本智郎(つなぎ美術館)	思考の連続性を促す指導・環境づくりの工夫 古鎌幸一(愛媛大学教育学部附属小学校)	イスラム世界における美術教育 箕輪佳奈恵(筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程芸術専攻)
11:00 ~ 11:30	20世紀後半以降の美術科教科書における「国際化」題材に関する研究—東西美術の交流からデジタル教科書の出現まで— 山口喜雄(宇都宮大学)	描出視線経路へ感情語を記入する鑑賞教育方法—鑑賞文と構図決定格子への接続— 金子一夫(茨城大学)	対話による鑑賞活動における経験・語り・知覚の生成過程 本間美里(兵庫教育大学連合学校教育学研究所/港区立御成門小学校) 松本健義(上越教育大学)	国吉康雄と対話する・国吉康雄で対話する—『ベネッセアートサイト直島の原点—国吉康雄展』と『国吉祭2013』における対話型鑑賞の展開と可能性— 森弥生(関西福祉大学非常勤講師) 江原久美子(公益財団法人福武財団国吉康雄プロジェクト)	総合大学におけるドローイング授業実践の効果の検討: アンケートと眼球運動実験から 石黒千晶(東京大学大学院教育学研究科) 八折健(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科) 小澤基弘(埼玉大学教育学部) 岡田猛(東京大学大学院教育学研究科)	中学生を対象とする文章記述を用いた美術鑑賞教育の指導に関する一考察 佐藤絵里子(筑波大学大学院)	造形活動における知的障害児のコミュニケーション成立条件に関する一考察 森慈恵(筑波大学附属大塚特別支援学校)
11:35 ~ 12:05	図画工作・美術科の授業における教師の発話に関する実践研究Ⅳ「国際—深沢アート研究所「こども造形教室」と図画工作・美術科の授業の比較から— 大泉義一(横浜国立大学) 山添joseph勇(深沢アート研究所)	プラチナ・トーク<特別招待発表> 芸術(美術・工芸)教育—深沢アート研究所「こども造形教室」と図画工作・美術科の授業の比較から— 宮脇理(Independent Scholar/元・筑波大学教授) 山本朝彦(鳴門教育大学)	協働的表現行為と生命的な「場」の成り立ち 三丞美千郎(珠洲市立飯田小学校) 松本健義(上越教育大学)	日韓のアニメーション比較 韓希暉(茨城キリスト教大学(非))	「共感性」は図画工作の授業の中でどのようにあらわれているのか 伊藤龍豪(川崎市立南生田小学校・横浜国立大学大学院教育学研究科)	美術館連携による校外実践型教育と校内通常授業との相互関係における考察—海外アーティストとのコラボレーション制作を実施して— p.00 竹内千恵(愛知県立愛知工業高等学校)	

昼休み(大学食堂 営業)

研究発表Ⅲ

13:00 ~ 13:30	ロベール・カンパン「メロデー祭壇画(1425-30年頃)」の読解的鑑賞の提案 岡田匡史(信州大学)	多職種にわたるデカルコマーニ—実践の試み(1)~幼児と小学生の描画行為の比較~ 大島孝明(富山大学人間発達科学部附属小学校) 隅敷、鼓みどり、上山輝、若山育代(富山大学) 萩原至道(富山大学人間発達科学部附属中学校) 米崎瑛美、林智子(富山大学人間発達科学部附属幼稚園)	戦後民間美術教育運動と「美育文化」 穴澤秀隆(NPO法人市民の芸術活動推進委員会理事)	教育政策におけるカリキュラムの統合原理と美術科教育 藤原智也(倉敷市立船穂中学校)	テート・ブリテン 家族向けプログラム「リミナル」の実施/評価の報告 酒井千波(テート・ギャラリー)	肢体不自由の生徒における共同制作の有用性—屏風制作を通して— 小原智史(静岡県立西部特別支援学校)	児童の絵の評価に関する研究Ⅰ—教員養成系大学の学生に対する評価アンケートの分析から— 八折健(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科) 萩生田信子(埼玉大学)
13:35 ~ 14:05	乳幼児造形から小学校教育への接続と展開—生活と学びの土台をつくる造形の遊び— 丁子かおる(和歌山大学)	「チャイルドカルチャーデザインの研究」—キッズカフェ・デザインプロジェクト— 春日明夫(東京造形大学)	戦後美術教育における東京都図画工作研究会の活動 辻政博(帝京大学) 穴澤秀隆(NPO法人市民の芸術活動推進委員会理事) 宮脇理(Independent Scholar/元・筑波大学教授)	中学校美術科におけるクロスカリキュラムの構想と実践—国語科教材とつながる鑑賞領域の事例として— 小浜かおり(徳島県那賀町立驚敷中学校)	他者の視線を参照して表現主題文を設定した自己像制作—自己の視線のみによる制作との比較を中心に— 中川知子(茨城県つくば市豊里中学校) 有田洋子(鳥根大学) 金子一夫(茨城大学)	シュルレアリスム展における体験的な取り組みについて—学校等への拡がりを中心として— 亀井幸子、友井伸一(徳島県立近代美術館)	感性の発揮を促す題材の工夫 平尾真治(愛媛大学教育学部附属小学校)
14:10 ~ 14:40	美術教育における学習観と表現指導における協同学習の機能 上山浩(三重大学)	プラチナ・トーク<特別招待発表> 子どもの絵の表現の発達の道筋 図式期から写実の黎明期・写実期について 東山明(神戸大学名誉教授)	美術館を拠点とした学校・地域の連携プログラム—「なつやすみの美術館」展を題材に— 青木加苗(和歌山県立近代美術館)	幼児と小学校低学年児童による絵画を使った「物語作り」 若山育代(富山大学) 森敏昭(広島大学)	長澤彦雪「龍虎図」の鑑賞実践に関する考察 保富仁之(和歌山県立田辺高等学校)	美術館における「ティーチャーズ・ワークショップ」—段階的な作品理解の試み— 山田敦子(半田市立半田中学校)	

15:00~17:40 シンポジウム「美術科教育におけるコミュニケーション、ことば、言語活動」(大学講堂)

18:00~20:30 懇親会(大学内・山田ホール)

研究発表Ⅳ

	A会場(大講義室)	B会場(101講義室)	C会場(102講義室)	D会場(201講義室)	E会場(206講義室)	F会場(208講義室)
9:00 ~ 9:30	美術教育史の教材としての『聖職の碑』 吉田貴富(山口大学)	4、5歳児のつぶやきと鑑賞 —美術館と保育所の連携活動の記録から 森芳功、亀井幸子、竹内利夫(徳島県立近代美術館)	小学校における集団がもたらす造形活動 蝦名敦子(弘前大学)	エクステンジブプログラムにおける造形教育の取組み 大塚習平(ソニー学園湘北短期大学)	造形教育とアタッチメント理論についての一考察 岡照幸(国立音楽大学附属小学校)	CMSを用いた美術教育のためのWEBサイト構築 伊藤裕貴(福井県立藤島高等学校)
9:35 ~ 10:05	教員養成の高度専門化に向けた美術教育カリキュラム(1) 新聞伸也(滋賀大学)	教育思潮・芸術思潮としての『芸術による教育』 —成立の思想的背景を探る試み— 山木朝彦(鳴門教育大学) 宮脇理(Independent Scholar/元・筑波大学教授)	身体的な学びを取り入れた映像メディア表現による協同学習の実践的研究 鈴木紗代(館林市立第十小学校) 茂木一司(群馬大学)	表現活動を活性化する言葉の役割 木村早苗(松山市立高浜小学校)	アトリエのある保育～乳幼児の姿・表現・育ち～ 照沼晃子(関東学院大学)	小学校における水彩絵の具の造形操作を生かした絵画表現意欲を促す題材の実践的研究 岡田温子(奈良教育大学大学院)
10:10 ~ 10:40	粘土を使った活動実践とその可能性 ～大学、地域学校園、および近隣地域での実践より～ 加藤可奈衛(大阪教育大学) 岡田陽子(大阪府河南町立近つ飛鳥小学校)	次世代「ものづくり教育のCurriculum構想」への助走 —中国・義島塘李小学校における「剪纸(せんし/切紙)」授業に関する考察から— 佐藤昌彦(北海道教育大学) 徐英杰(筑波大学博士後期課程) 宮脇理(Independent Scholar/元・筑波大学)	美術教育における「自由」を考える —理論探求の場から— 谷口幹也(九州女子大学) 西村徳行(筑波大学付属小学校)	美術科における自己調整学習の分析 春野修二(福岡教育大学附属小倉中学校)	擬態語を用いた授業実践についての一考察 西園政史(聖徳大学附属女子中学校高等学校)	中等美術科教員養成における教職レディネスの形成 —省察的活動を導入した「中等教科教育法Ⅰ(美術)」の実践を通して— 竹内晋平(奈良教育大学)
10:45 ~ 11:15	ものをつくる経験が減少していく時代の造形教育を考える —保育者養成課程における事例— 葉山登(横浜創英大学)	プラチナ・トーク<特別招待発表> 学会草創期の思い出 花篤實(大阪教育大学名誉教授)	美術教育における「自由」を考える —授業実践の場から— 西村徳行(筑波大学付属小学校) 谷口幹也(九州女子大学)	美術史の知見を人々に伝える試み:横浜異文化表象ミニ展覧会を事例に 井上由佳、野呂田純一(文教大学) 鈴木智香子	図画工作科における英語活動 —図画工作科のできることに— 樋口和美(福岡教育大学)	
11:25 ~ 12:55	美術教育史研究部会 地方美術教育史の諸相Ⅱ 花篤實 長瀬達也 有田洋子	工作・工芸領域部会 学社連携による工作・工芸教育支援について 齋藤学	乳・幼児造形研究部会 「児童期につながる幼児の造形—基本理念と実践—」 清原知二 丁子かおる	アート&ケア研究部会(仮) アート&ケア研究部会(仮)設立準備会 茂木一司		

※ プログラムの内容については変更する場合があります。

発表者の方へ

1. まれにノートパソコンとプロジェクタを正しく接続しても、プロジェクタ側でノートパソコンからの信号を検知しない(画像が投影されない)場合があります。このようトラブルを未然に防ぐため、休憩時間や会場が使用されていない時間帯等に、該当の会場にて接続テストを実施していただくことをお勧めいたします。
※ お手持ちのパソコンの解像度・周波数等が高く設定されていることが上記トラブルの原因となる可能性があります。この場合は、「画面のリフレッシュレート」を低く設定することで解決する場合があります。
※ 音声出力には対応していません。
2. 研究発表の進行は、次のように行います(時間厳守をお願いします)。
一鈴:15分経過、二鈴:20分経過、三鈴:30分経過(質疑応答終了)

第9回 世界ファブラボ会議 国際シンポジウムと次世代ものづくり教育

佐藤昌彦 (北海道教育大学)

はじめに

世界におけるものづくりの新たな動きとは何か。そしてその動きを踏まれば何が次世代ものづくり教育のキーワードになるのか。それらの問いに答えるために、2013年8月26日、横浜市で開催された第9回世界ファブラボ国際シンポジウムに出席した。ヨコハマ創造都市センターや KAAT 神奈川芸術劇場ホールなどの会場で、3Dプリンターやカッティングマシンに関する工房見学会、世界各国のファブラボ代表による実践発表、日本のものづくりの方向性に関するパネルディスカッションが行われた(図1・2・6)。本稿ではファブラボとデジタル・ファブリケーションを切り込み口として、だれでもどこでもほぼ何でもつくることができるという未来の姿を提示した世界ファブラボ会議国際シンポジウムの状況を報告する。さらに次世代ものづくり教育のキーワードにも言及したい。



図1 (左) 工房見学会での展示



図2 (右) 会場/K A A T 神奈川芸術劇場

1 世界におけるものづくりの新たな動きとは何か —ファブラボとデジタル・ファブリケーション—

ファブラボとはファブリケーション(ものづくり)とラボトリー(研究室)を組み合わせた造語である。工房見学会の会場に掲示された「ファブラボ憲章(日本語版)」には「FabLab(ファブラボ)とは、3次元プリンタやカッティングマシンなどの工作機械を備えた、誰もが使えるオープンな市民制作工房の世界的なネットワーク」と記載されている。シンポジウムではこうした世界のファブラボ代表者によって様々な視点からの発表が行われた。その事例として以下に3つの発表題目をあげた。第1はファブラボの提唱者であるニール・ガーシェンフェルド氏(Neil Gershenfeld, 米国, マサチューセッツ工科大学教授)の「ファブラボとは何か? 過去, 現在, 未来」(図3)。コンピュータの登場と進化及びデジタル工作機械の登場と進化についての歴史を概観するとともにファブラボの起源やほぼ何でもつくることができるようになる未来の姿について語った。第2はセルジオ・アラヤ氏(Sergio Araya, チリ, ファブラボ・サンティアゴ)の「ファブラボとバイオテクノロジー」。ファブラボは「図工室」そしてパイオラボを「化学実験室」に対応させながら、自然と親和する建築や新素材の研究開発など、2つのラボが協働する研究の姿を紹介した。第3はイエンス・ディヴィック氏(Jens Dyvik, ノルウェー, ファブラボ・ノマド, ファブラボ・

オスロ)の「ファブシネマ/つくること・いきること・わかちあうこと」(Fab Cinema“Making,Living,Sharing”49分)。約2年間にわたって世界各地のファブラボを撮影した映画を上映。3Dプリンターなどの工作機械でミニヘリコプターをつくる様子が映し出された。FabLaB Japan(国内外のファブラボをつなぐネットワーク)はこうしたファブラボに関して次のような説明を加えている。20世紀は大量生産・大量消費の時代であったが21世紀はパーソナル・ファブリケーションの時代へ向かっていること。インターネットの普及によって誰もが自由に情報発信できるようになった。同じようにファブラボが各地に普及することで誰もが自由にものづくりができるようになること。デジタル工作機械は急速に低価格化しており、いずれは一家に一台普及する時代がやってくること(註1)。

デジタル・ファブリケーションとは3Dプリンターや3Dスキャナーなどを活用して「データをものに変え、ものをデータ化するものづくり」を意味する言葉である。会場ではニール・ガーシェンフェルド氏の論文「第三の産業革命—モノをデータ化し、データをモノにする—」がデジタル・ファブリケーションに関する資料として配布された(『フォーリン・アフェアーズ・レポート』2012年11月号掲載論文, 註2)。「新たなデジタル革命が迫りつつある。今度はファブリケーション(モノ作り)領域でのデジタル革命だ。(中略)バーチャルな何かではなく、フィ



図4 文献①Neil Gershenfeld (ニール・ガーシェンフェルド)『第三の産業革命—モノをデータ化し、データをモノにする』フォーリン・アフェアーズ・レポート2012年11月号掲載論文(How to Make Almost Anything—The Digital Fabrication Revolution)。②Neil Gershenfeld (ニール・ガーシェンフェルド)『Fab パーソナルコンピュータからパーソナルファブリケーションへ』オライリー・ジャパン, 2012。③田中浩也『FabLife—デジタルファブリケーションから生まれる「つくりかたの未来」』オライリー・ジャパン, 2012。④田中浩也・門田和雄編著『FABに何が可能か「つくりながら生きる」21世紀の野生の思考』フィルムアート社, 2013。⑤Chris Anderson (クリス・アンダーソン)『MAKERS 21世紀の産業革命が始まる』NHK出版, 2012

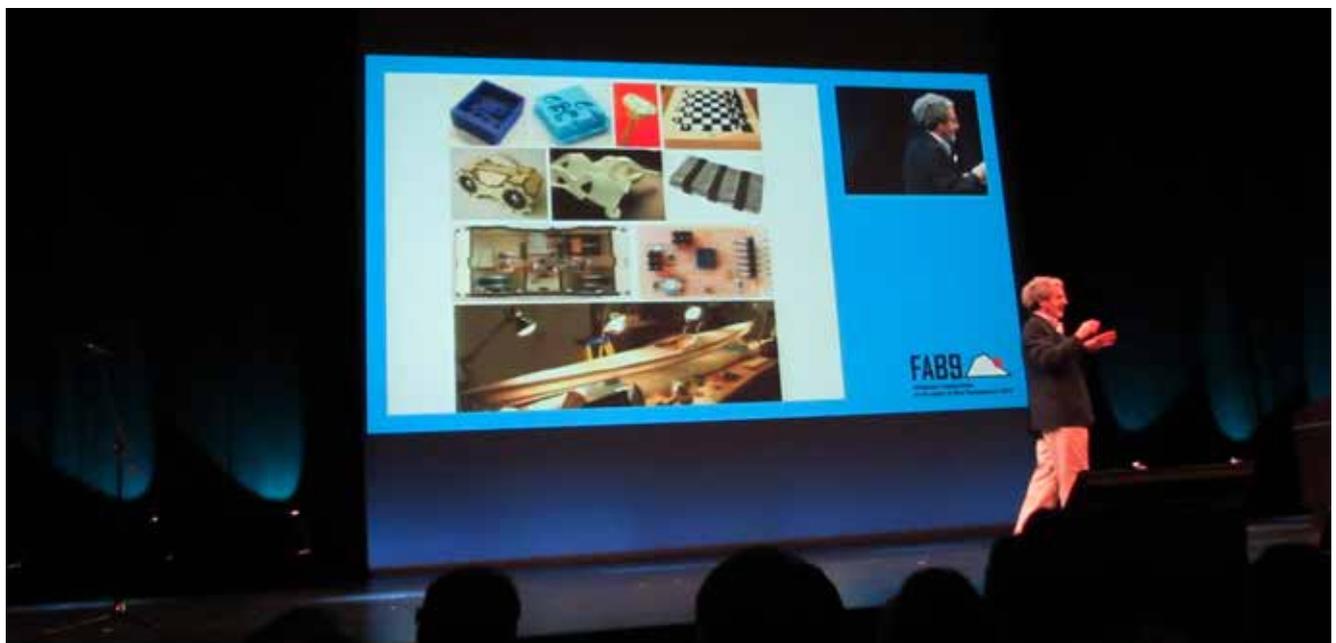


図3 ニール・ガーシェンフェルド氏の発表「ファブラボとは何か？」

「デジタルなモノそのものだ」という言葉で始まり、だれでもどこでもほぼ何でもつくることができる社会の姿を提起した。主要な観点は次の9つ。「新しいデジタル革命」「3Dプリンターの登場」「デジタル・ファブリケーションとコンピュータの進化」「世界に広がった『ファブラボ』」「デジタル・ファブリケーションの活用」「素材のデジタル化」「3DアSEMBラー」「自己複製システムが伴う問題」「技術革新」。切実な脅威として「3Dプリンターによる武器製造(セミオートマチックライフルAR 15)」の事例も示し、今後へ向けては「だれもがどこでも何でも作れる世界で、われわれはどのように暮らし、学び、仕事をするようになるのか。現在進行中の革命が突きつける中核的な疑問にこたえることが、われわれの大きな課題であろう」という言葉で近未来に向き合う人間の在り方を提起している。ニール・ガーシェンフェルド氏の論文も含めて、『Fab パーソナルコンピュータからパーソナルファブリケーションへ』『FabLife』『MAKERS』などのファブラボ関

連の文献や新聞記事(2013年8月27日)を上や次ページに示した(図4・5)。

2 次世代ものづくり教育のキーワードは何か —責任・生命・自然—

世界ファブラボ会議国際シンポジウムの内容を踏まえれば、次世代ものづくり教育のキーワードは何になるのか。端的に言えば3つある。1つ目は「責任」。だれでもどこでもほぼ何でもつくることができるのであれば、創造面や技術面とともに「ものづくりには責任が伴う」という倫理面を一層重視しなければならないからである。では「責任」とは何を指すのか。結論から言えば、その根本は「生命を守ること」と答えることができる。2011年3月の東京電力福島第一原子力発電所の事故はそのことを明確に示した。3年目になる今でも約14万人が避難生活を続けている(福島民友新聞, 2014.1.1)。国会事故調(東京電

力福島原子力発電所事故調査委員会)は報告書の中で直接的な原因は地震・津波にあるが、おおもとの事故原因は「生命を守るという責任感の欠如」にあると指摘した(『国会事故調報告書』徳間書店,2012.9.30)。この「生命」が2つ目のキーワードである。それでは「生命」を守る基本は何か。さらにそう問われれば3つ目のキーワードとして「自然」と答える。空気、水、土などの自然環境が放射性物質で汚染され多くの人々が生きる場を失ったからである。放射線量の高い地域はその量の違いによって、帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域という3つの区域に再編された。「責任」「生命」「自然」は次世代ものづくり教育のキーワードであるとともに日本が3.11の大惨事から再興するためのキーワードでもある。

おわりに

次世代ものづくり教育を構想するためには幅広い視点からの検討が必要になる。今、取り組んでいる内容は次の5つ。第1は、日本の小学校におけるものづくり教育の検証。戦後(1945年以降)の系譜の再確認である。何をめざしてきたのか。そして何が

欠如していたのか。第2は、世界のものづくり教育の調査。何を「人間として責任のもてるモデル」(教育の規範)としているのか。第3は、工作教育発祥の地・フィンランドでの調査。現在、どのように「責任」の問題を考えているのか。第4は、世界のものづくり教育史に関する文

献の翻訳。人間の責任において行うものづくり教育をどう考えてきたのか。第5は、未来を見通した考察。社会におけるものづくりの課題は何か。今回のファブラボやデジタル・ファブリケーションはこの第5の視点に関連する。生きる場を失うことになった福島第一原発事故後の現実に正対するのであれば、次世代ものづくり教育の構築は日本の最重要課題であろう。

註1 <http://fablabjapan.org/whatsfablab/>

註2『フォーリン・アフェアーズ・レポート』は、1922年9月、アメリカで創刊された政治・経済・外交等の専門誌であり、世界的な影響力をもつ論文発表の場となっている。



図4 ◎ Fabの本制作委員会『実践 Fab・プロジェクトノート：3Dプリンターやレーザー加工機を使ったデジタルファブリケーションのアイデア40』グラフィック社、2013。

図5 翌日の朝刊「誰でもものづくり提唱」日本経済新聞,2013.8.27

図6 工房見学会で。制作の実演(下2点)



史料としての美術教育関係雑誌

金子一夫 (茨城大学)

1. 美術教育関係雑誌の全体像把握

美術教育史研究の基礎的データとして全体像を把握したいと私が思っているのは、戦前の図画教員勤務、図画教科書、そして美術教育関係雑誌である。ただ、それぞれ膨大な量であり、その全体像把握は簡単ではない。

戦前の図画教員勤務に関しては、各府県における中等学校図画教員勤務表を調査完成度の高い府県から少しずつ発表している。戦前の中等学校数は旧植民地や外地も含めて約4,000校、図画専門教員も数千人になるであろうが、数年後には全体を明らかにできるのではないかと考えている。

戦前の図画教科書数は約1,000種と推定する。これも書目だけの調査なら比較的容易であろう。検定制実施後の教科書には、文部省作成「検定済教科用図書表」がある。しかし、それぞれの改訂版の有無、実際の内容、所蔵機関の調査確認までをやろうとすると、簡単ではない。

美術教育関係雑誌は、各時期の美術教育状況を知る上で重要な史料である。戦前の美術教育関係雑誌は約50種と推定している。その数からは簡単そうに見えるが、実際に何号まで発刊されたか、所蔵機関とその所蔵巻号の確認までしようとすると大変である。公的機関の所蔵雑誌はデータベースがあり、ネット検索もできる。ただ、美術教育雑誌はあまり公的機関に所蔵されていない。ましてや記事まで確認するとなれば大変である。たとえば『手工研究』『美育』は、200冊以上あるし、全冊揃って所蔵している公的機関もない¹⁾。

創刊号、あるいは三号で終わってしまった雑誌も多いと思う。それらはたまたま古書市で発見されるのを待つのみである。また、図画教員の遺族のもとに未知の美術教育関係雑誌が残っている可能性もある。最近、某氏が戦前の図画教員の遺族調査をしたら、何と『図画教育通信』があったという。同通信は川村東陽が編集発行していた雑誌で、山本鼎の自由画に対する諸氏の談話が載ったと山本自身が記しているの、その存在は知られている。実物は見つからなかった。ただ、先の遺族のもとに残っていたのは、該当号ではないらしい。今後、研究者の前に未知の雑誌が出現してくる可能性は十分にある。

2. 戦前の美術教育関係雑誌リスト

戦前と戦後30年代まで、私の把握している美術教育関係雑誌を創刊年代順に挙げる。原則として学校美術教育に関するものとする。これらは私が少なくとも1冊は所蔵、ある

いは実見した雑誌である。復刻版のある『芸術自由教育』を除き、これらは公的機関が所蔵していないか、部分的にしか所蔵していない。調査にかかる膨大な労力を考えると、このリストを見て調査意欲が湧くというより、萎えてしまうかもしれない。

1. 『図画教育』(図画教育会)
明治36年12月～大正4年12月。全28冊。
2. 『図画講習録』(速水不染編、図画講習会)
明治40年11月。第1号確認。
3. 『錦巷』(『図画と手工』『図画と工作』)(錦巷会)
明治44年～昭和16年6月 全256冊。
4. 『手工研究』(宝文館、手工研究会等)
明治45年7月創刊～昭和18年8月。全273冊。
5. 『図画研究』(図画教育研究会編、晩成処)
明治45年7月～大正14年6月。
6. 『新図画』(新図画社)
大正3年。同年6月の第2号を確認。
7. 『芸術自由教育』(山本鼎編、アルス)
大正10年～11月。全10冊。
8. 『芸術教育』(芸術教育会、集成社)
大正12年～15年。
9. 『図画研究』(三省堂)
大正14年～昭和5年3月第31号まで確認。
10. 『日本図画教育』(浜田盛基編、日本図画教育会)
大正6年 第三号まで確認。
11. 『図画教育』(日本図画教育会)
大正12年～昭和6年の第9巻第12号まで確認。
12. 『美育』(図画教育奨励会、晩成処発行)
大正14年7月創刊～昭和17年10月。全208冊。
晩成処発行の『図画研究』の継続誌。
13. 『美術教育』(図画文検会)
大正14年～15年頃。第1巻第7号確認。
14. 『手工図画研究』(本吉信雄編、手工図画研究会)
昭和2年創刊。9月発行の第3号確認。
15. 『学校美術』(後藤福次郎編、学校美術協会)
昭和3年1月創刊～昭和15年9月。全153冊。
16. 『図画手工大観』(図画手工強調会)
昭和4年6月～。同年7月発行の第1巻第2号を確認。
17. 『技能科研究』(技能科研究会)
昭和5年5月、第1号確認。
18. 『構成教育』(桐光会、東洋図書)
昭和6年創刊～。昭和7年5月の第2巻第2号を確認。

19. 『色と形』(谷喜一編、色と形社)
昭和12年11月～昭和14年3月に17号まで発行されたことは確認。
20. 『図画工作』(図画工作社)
昭和15年10月～昭和18年12月。全39冊。
『学校美術』の改題誌。
21. 『新興美育』
昭和9年創刊～昭和14年5月号まで確認。
22. 『図画室通信』(図画室通信社)
昭和10年～16年5月、63号まで確認。
23. 『図画と作業』(図画教育研究会編、三省堂)
昭和7年6月～10年5月号まで6冊確認。
24. 『造形美育』(立川精治編、造形美育協会)
昭和6年5月創刊～昭和8年2月まで確認。
25. 『創作工芸』(創作工芸奨励会)
昭和9年5月～昭和15年10月、全79号で廃刊となり、『手工研究』に統合される。
26. 『芸能科研究』(芸能科研究会)
昭和9年～。昭和16年3月発行の第8巻第2号を確認。
数誌の統合誌か。
27. 『錦巷会々誌』
年刊。昭和10年～12年までの3冊確認。
28. 『図画師範科消息』
昭和12年。2冊確認。
29. 『日本美育』(日本美育協会)
昭和11年5月～7月。第1～3号まで確認。
30. 『教育美術』(教育美術社)
昭和10年4月～昭和16年6月。全
昭和12年7月より教育美術振興会発行。
31. 『手工教育』(東京手工研究会)
昭和14年4月創刊。創刊号確認。
32. 『造形教育』(東京美術振興会)
(教育美術、図画と工作、図画室通信の統合)
昭和16年7月～昭和18年2月。全20冊。



『錦巷』第1号
(明治44年4月)



『図画研究』第1巻第1号
(明治45年7月)



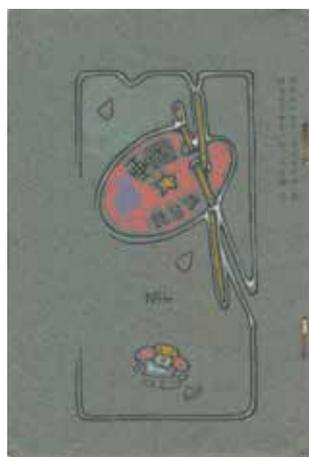
『新図画』第2号
(大正3年6月)



『図画教育』第2巻第1号
(大正13年1月)



『図画教育』第2号
(明治37年8月)



『図画講習録』第1号
(明治40年11月)



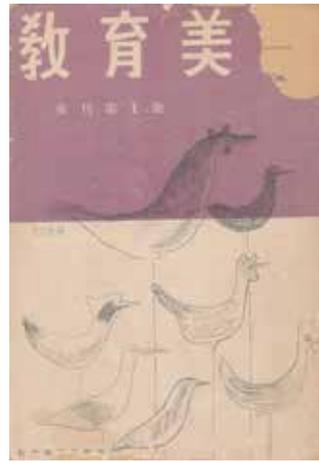
『美術教育』第1巻第7号
(大正15年6月)



『日本美育』第1号
(昭和11年5月)



『美術教室』第4号
(昭和23年1月)



『教育美術』復刊第1号
(昭和24年7月)

7. 『現代美育』(現代美術教育協会)
昭和27年10月創刊。昭和28年5月の第3号を確認。
8. 『芸術と美育』(長田江平、芸美社)
昭和29年10月。創刊号のみ確認。
9. 『子供の美術』(岩本恒雄編、峰書房)
昭和30年10月創刊。創刊号のみ確認。
10. 『造形ニュース』(開隆堂出版)
昭和31年4月～
11. 『形』(日本造形教育協会)
昭和31年6月～現在。
12. 『美術通信』(日本文教出版)
昭和39年4月～9月。全6冊。
13. 『クラフト』(日本学校工作普及会)
昭和38年頃～ No.16 確認。

4. 通信教育用雑誌

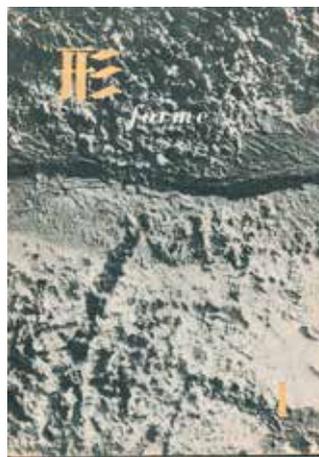
明治36年12月図画教育会発行の『図画教育』が学校美術教育を内容とする最初の雑誌であろう。それ以前に松田霞城編『教育日本画誌』(田沼書店→日本画会、第1号～第5号、明治28年9月～33年5月まで確認)がある。これは学校というより毛筆画の一般普及を目的とした会員制雑誌である。また、学校外で美術を学ぼうとする人のための通信教育用雑誌は『正則洋画講義』をはじめとして種々ある。文部省中等教員図画科検定試験受験者の予備校「緑蔭社絵画研究所」が発行していたガリ版刷りの「通信」もある。それぞれ面白いのであるが、これらは別途取り上げることにはしたい。

註

- 1) 『手工研究』の全冊をみて雑誌としての考察した論文として、佐々木亨「雑誌『手工研究』の刊行状況」『技術教育学研究』第2巻、1985年、1-8頁、がある。佐々木は技術科教育専門の名古屋大学教授。



『美育文化』第1巻第4号
(昭和25年11月)



『形』第1号
(昭和31年6月)

3. 戦後初期の美術教育関係雑誌

1. 『美術教室』(学童美術協会)
昭和22年～24年以降。中谷健次編、天井陸三編の2冊確認。
2. 『スクールアート』(芸術学会、芸術科学社)
昭和24年1月創刊。同年12月の12号まで確認。
3. 『教育美術』(教育美術振興会)
昭和24年7月復刊第1号～現在。
4. 『美育文化』(美育文化協会)
昭和25年8月創刊～現在。
5. 『美術教育』(日本美術教育学会)
昭和26年11月創刊～現在。
6. 『color』『カラーサークル』(色彩教育研究会)
昭和28年9月で5巻9号とあり。昭和41年4月から『デザイン教育』と改題。

秋田県自由画教育の研究

長瀬達也 (秋田大学教育文化学部)

遅滞とした歩みで美術教育史の研究を続けていますが、対象は秋田県における自由画教育です。

御存じの通り、山本鼎を中心とする自由画教育は、大正7年に長野県上田から全国に展開されて、臨画教育、さらには実用性を標榜する教育的図画さえも否定したことで、様々な意見や賛否、指導方法などが激しく交錯しました。そして、多くの諸先輩が研究対象とし、成果を上げられました。私にとっては現在でも尽きない魅力があり、今後の美術教育を考えていく基盤としています。

この自由画教育が当時、長野県や東京から遠く離れた北東北の秋田県と、どのように出会い、いかなる軌跡を歩んだのか、つまり地方の視点から研究を始めたのが平成5年です。研究の発端は、秋田県の湯沢市立湯沢東小学校（戦前は湯沢尋常高等小学校）に保存されていた図画作品群に出会い、感動したことによるものです。その際、故石原英雄先生や、筑波大学の石崎和宏先生（当時は秋田大学）に同行していただき、研究対象とするように勧められました。同校には明治45年（大正元年）から昭和6年度までのものだけでも軸物43点が保存され（その中の図画作品は462点）、更に昭和40年代までの作品が保存されていました。そこには、自分が知識としては知っていた図画教育の歴史の一端が、確かに事実として存在していました。特徴の一つは、東京などと比較すると2年程度の遅れがあることで、例えば自由画的な図画作品の登場は同校では大正10年です。

大正10年以降の秋田県では、一気に山本の自由画教育論に賛同した実践が見られるようになります。山本鼎、白浜徹、小原国芳、赤井米吉、松岡正雄、後藤福次郎なども登場します。教員の指導がクレヨンによる風景画という型に収束するという、全国的に見られた弊害も生まれています。このような歩みを平成7年3月に修士論文「秋田県における自由画教育運動に関する研究」にまとめましたが、研究の出発点にやっと立てたというところでした。

この研究の過程で、当時の秋田県では自由画教育に関する議論や、秋田県の実情に合った指導方法の追究などが、一部

の熱心な教員の中にとどまり、その他の多くの教員には山本鼎の自由画教育の本質が理解されずに、自由画という「型」だけが広がっていた姿が見えてきました。また、地方のメディアであった『秋田魁新報』などの地方紙が、山本や自由画教育を支持する姿勢を示していたことなども見えてきました。このような視点から現在の小学校図画工作科を見たとき、一部の自治体を除いて学級担任が指導している実態（その中には苦手意識などを持っている教員が数多く含まれる）や、社会や保護者などへのアピールの必要性についても、一層深く考えなくてはならないと思うようになりました。そのためには研究を継続し、秋田県で自由画教育に熱心に取り組んだ教員などの考え方や影響力、当時の一般の教員による指導の実態、『秋田魁新報』などの地方紙の自由画に対する姿勢などを更に深く調査して、ヒントを得ることが重要と考えました。また、このやり方が、ゆっくり型の自分には合っていると思いました。

以上のような考えから、現在も秋田県における自由画教育の研究を続けています。成果はこれまで美術科教育学会誌『美術教育学』に、「秋田県自由画教育の研究」として（1）から（8）までを掲載させていただきました。支えていただいた美術科教育学会誌編集委員会、そして査読者の皆様には感謝の言葉しかありません。しかし、「秋田県自由画教育の研究」はまだ終わっていません。何とか今年度でまとめたかったのですが、力不足と新資料の発掘などでまとめきれませんでした。

「秋田県自由画教育の研究」で活用している主な資料は次の通りです。

（1）秋田県の自由画関係の図画

秋田県の自由画関係の図画ですが、実物が保存されているのは、湯沢市立東小学校が保存していた、湯沢尋常高等小学校時代のものだけのようです。同校図画については、大正元年（明治45年）度から昭和6年度までの462点をスライドで撮影して、更に学年、名前、題名、大きさ、筆者が観察し

たことをリストにまとめました。秋田県自由画教育の水準の一端を示す資料と考えています。

(2) 『秋田県教育雑誌』

戦前に発行されていた『秋田県教育雑誌』（大正13年からは『秋田教育』）は月1回発行で、編集は秋田県師範学校（大正13年からは秋田県教育会事務局）でした。主に秋田県関係の教育に関する記事や、秋田県の小学校教員の論文などが掲載されています。なお、他の都道府県でも同じような雑誌が発行されていたと考えられます。この『秋田県教育雑誌』の目次が掲載されている日本図書センター発行『教育関係雑誌目次集成』で、図画や手工などに関連した記事や論文などの題名、それらが掲載されている号の発行年月日などを見つけてリストを作成しました。これを基にして、秋田県立図書館にある『秋田県教育雑誌』をひたすら複写し、整理して、現在も活用しています。

(3) 『秋田魁新報』などの地方紙

私にとって『秋田魁新報』などの当時の地方紙は、資料として特に重要です。現在の新聞より教育関係の記事が多く、師範学校や小学校の教員の寄稿や投稿も数多く掲載されています。図画や手工に関する取組や考え方、そして展覧会などに関することが、様々な角度で直接伝わってきます。しかし、調査、収集は簡単ではありません。調査では秋田県立図書館にあるマイクロフィルムを見ていきますが、写りがクリアではないので回しながら図画や手工などに関することを探すことは、老眼が進むにつれてつらくなっていきます。戦前の秋田県で全県を取材や配達の対象としたのは、主に『秋田魁新報』など3紙です。『秋田魁新報』以外の2紙は休刊や、発行者の入れ替わりなどがあって、系統的に調査するのに困難があります。『秋田魁新報』は編集者に良い人材を得たり、写真製版の設備も持ったりして、他紙を圧倒して部数を伸ばす中で、頁数を増やしていきました。大正14年9月中旬からは夕刊も発行しました。つまり、時代が進むにつれて調査量が増えていくことになります。現段階では、大正8年4月1日から昭和3年12月31日までの『秋田魁新報』についてはすべて見ました。他の2紙についても同じように進めたいと思っています。現段階では、図画や手工などに関連する『秋田魁新報』など地方紙の約70の記事を、学生にも協力してもらってワープロ入力し、いつでも調査、分析できるようにしています。

(4) 秋田県師範学校及び秋田県女子師範学校の『校友会誌』

秋田県で大正12年に開催された「全県図画研究会」で松岡正雄と白浜徹の講演があり、昭和3年に秋田魁新報社が開催した「御大礼記念全県小学校児童作品展覧会」では山本鼎と後藤福次郎の講演がありましたが、共に内容は不明でした。しかし、秋田大学附属図書館書庫に保管されていた、秋田県女子師範学校『校友会誌』に松岡の講演記録が、秋田県師範学校『校友会誌』に山本の講演記録がそれぞれ掲載されていました。講演内容がわかるだけでなく、秋田師範学校及び秋田県女子師範学校の図画教員が、松岡及び山本を高く評価していたことを意味すると考えています。

上記以外にも多くの資料を活用しています。大正11～12年頃から次第に、図画教育や自由画教育などの資料が増えていきますが、秋田県の地方紙や印刷所の発展も一因ではないかと思います。新資料を更に発掘して、秋田県の図画教育に関する資料をまとめ、諸先輩の研究成果を参考にしながら、更に研究を進めたいと思います。

戦後の教員養成大学・学部における美術教育学の制度的基盤の成立過程

有田洋子 (島根大学)

現在、美術教育学は、美術専門とは異なる独自性をもつ一つの学としてある。本学会の名称は「美術科教育学会」で、学会誌の名称は『美術教育学』である。美術教育学の専門的研究者がおり、その授業が大学でなされ、それを経て美術科教員も養成されている。

しかし、学として認められるようになったのはそう昔ではない。少なくとも戦前の師範学校の図画教授法は図画専門内容と未分化であり、図画教育学としての独自性は認識されていなかった。それでは美術教育学はどのように成立したのか。

筆者は、美術教育学の制度的基盤の成立過程を、全国の教員養成大学・学部の人的制度の成立と人的配置の面から明らかにしようとしている。

教員養成大学・学部における美術教育学には、実質的な学問としての成立と人的制度の成立が考えられる。美術教育学の成立は人的制度とそれへの人的配置が先行し、その後、実質的内容が整備されていく過程となる。具体的には、戦前の師範学校から戦後の教員養成大学・学部への転換、そして教科教育専攻大学院設置へと変遷するなかで、美術教育学の人的制度と人的配置が確立していく。それは美術教育学が成立したことと同義ではないもののその前提としてある。しかも、その人的配置の過程はとても興味深い。

筆者は、戦前の師範学校から戦後の教員養成大学・学部への移行、さらに教科教育専攻大学院の設置までを、次の三段階の時期に区分して考察している。

1. 戦前の師範学校から戦後の教員養成大学・学部への図画工作担当教官の移行
2. 学科目の設置と具体的人員の配置
3. 教科教育専攻大学院の設置と展開

東京芸術大学をはじめとする最初期の事例を除き、概ね以下のような変遷となる。

1. 師範学校から教員養成大学・学部に移行して間もない頃は、美術教育学というものは認識されていなかった。その背景として一つには、師範教育の反省すなわち固くて狭い視野の克服のため、戦後の教員養成は教科教育の専門性よりも

教養教育が重視されていたことが挙げられる。つまり教科専門に重きが置かれ、美術講座は全国的に実技が中心に据えられていた。もう一つには、図画工作に関するのなら何でもできた師範学校教官が在職していたことが挙げられる。つまり教官に細分化された特定の専門は制度的に決まっていなかった。また、当時を知る花篤實氏は「戦後の教員養成の制度の中で、特に芸術系は実技講座を中心に構成されたために、美術教育は実技教官の『余技』として扱われることが多かった」と述べる¹⁾。

2. 昭和39年学科目制度発足により学科目「美術科教育」ができた。学科目制度発足により、美術講座は、絵画、彫塑、構成、美術理論・美術史、美術科教育の学科目を置くこととなった。教官の専門性が明確化された。ただ学科目ができて、担当者の研究内容との整合性は完全ではなかった。この時期、美術教育学の専門的な研究者は僅かにしか存在しなかった。美術科教育の担当は、実技に熟達した者こそ相応しいというような名誉として引き受けた、あるいはやむなく請け負わざるを得なかった実技系教官や、小・中・高等学校での教職経験者が担う場合があった。美術専門ができれば美術科教育も担当できる、美術教育実践ができれば美術科教育も担当できると捉えられていたことがうかがえる。その他に、美術科教育は実技ではなく理論であるとして美学や美術史の研究者が担う場合もあった。美術科教育の担当者をめぐって大学により様々な対応がとられた。制度上「美術科教育」は発足したが、美術教育学の独自性はまだ人的には反映されていなかった。

3. 教科教育専攻大学院設置により、美術教育学の専門性が認識されるようになった。美術科教育専攻大学院設置のためには、分野「美術科教育」に講義及び学位論文の指導が担当できる「**◎**目教官」と、講義及び学位論文指導の補助が担当できる「**合**教官」が一人ずつ必要であった。もちろん美術教育学に関する業績が審査対象とされた。大学院設置の頃、必要に迫られて美術教育学が制度的に成立したと言える。

ここで、本学会ホームページから代表理事永守基樹氏によ

る「代表理事挨拶」の一部を引用する。

「本学会が目指すものは美術教育学の確立とその振興です。／それは本学会が1979年に発足した経緯を見ても明らかでしょう。戦後のリベラルアーツによる教員養成が理念的にも機能的にも行き詰まり、教科教育学の確立が求められるなかで、美術教育学の研究者養成と学的な確立が社会的な要請だったのです。本学会は1980年代以降、多くの研究成果を生み、美術教育の理論的探求の場として中心的な役割を担ってきました。／しかし、美術教育学にとって、この成立の過程は、教育政策や行政からの外圧によってもたらされた側面もあります。この外から与えられた枠組みに内実を形成し、内側から美術教育の理論的世界を確かなものにしていくことが、本学会の責務でありました。」

これまでに筆者は、東京芸術大学、大阪教育大学、茨城大学、富山大学、岡山大学、山口大学、島根大学における美術教育学の制度的基盤の成立過程の変遷について研究発表を行った²⁾。平成26年3月の本学会奈良大会において奈良教育大学、京都教育大学、神戸大学等の場合について口頭発表する予定で、その他の教員養成大学・学部についても調査を進めつつある。調査を進めるなか、その成立過程は幾つかの類型に分けられるのではないかと思いつつある。例えば、師範学校から教員養成大学・学部への移行期に関しては、戦前の師範学校教員が戦後も長く勤務する場合と、講座の中心となるような有力な教官が戦後外部から着任して講座の様相が大きく変わる場合とに大別される。もちろん、いずれの場合も美術教育学の専門家が定着するには、紆余曲折があった。全国の教員養成大学・学部における美術教育学の制度的基盤の成立過程について、一つひとつの解明と全体像の解明とをともに進めていきたい。

また、現在、美術教育学の独自性は認められ、よりその内容を精緻化していく段階のはずである。

美術教育学は、美術専門とも教育学あるいは教育実践そのものとも異なる独立したものである。しかし、国立大学法人化以降の教員定員減のため、より根本的には予算削減のため、人的配置においてその独自性の維持が懸念される状況となりつつあるように見える。美術科教育担当者が美術教育専門を全うできない、あるいはその逆に美術専門家に美術科教育担当をさせる、また採用や昇任条件に教職経験に過剰な比重がかけられるような事態になりつつあるとの印象をもってしまふ。背景や意味は異なるとはいえ、このような積み重ねが前時代への逆行にならないことを望みたい。美術教育学は幾多

の悲喜交々を経て、そして諸先輩の多大なる努力の上に確立したことを銘記しておきたい。

付記：本研究は多くの方々のご協力のもと進めることができています。あらためて関係諸氏に深く御礼申し上げます。

- 1) 花篤實「一学会の過去と未来」美術科教育学会二〇年史編集委員会『美術科教育学会二〇年史』美術科教育学会平成11年、74頁。
- 2) 論文発表：「美術教育学の制度的基盤の成立過程—島根大学における人的制度と配置—」『島根大学教育学部紀要(教育科学)』第45巻、平成23年、47-55頁。「美術教育学の制度的基盤の成立過程—岡山大学における人的制度と配置—」『島根大学教育学部紀要』第46巻、平成24年、91-100頁。金子一夫・有田「美術教育学の制度的基盤の成立過程—東京芸術大学の場合—」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』第62号、平成25年、123-135頁。「美術教育学の制度的基盤の成立過程—山口大学における人的制度と配置—」『島根大学教育学部紀要』第47巻、平成25年、61-69頁。

口頭発表：「美術教育学の制度的基盤の成立過程—茨城大学・島根大学の場合—」『美術科教育学会第33回富山大会発表概要集』平成23年、81頁。「美術教育学の制度的基盤の成立過程—富山大学の場合—」茨城大学教育学部附属中学校授業づくり研究会、平成23年。「美術教育学の制度的基盤の成立過程—大阪教育大学・岡山大学の場合—」『大学美術教育学会第50回宮城大会発表概要集』平成23年、48頁。有田・金子一夫「美術教育学の成立過程—東京芸術大学の場合—」『美術科教育学会第34回新潟大会発表概要集』平成24年、102頁。

実践・地域と向かい合う学会（学術研究）

～大阪図画の系譜と文化ナショナリズムをめぐる～

花篤 實（元代表理事 大阪教育大学名誉教授）

1, 2項対立概念

A, 教育史を巡る2つの観点

・変化の視点 ～不連続、波打ち際（移入史）中央（東京）大学（学会）理論（理念）

・継続の視点 ～連続、内陸（定着、習合史）地域（地方）教育現場 実践（実技）

*戦後美術教育啓蒙書 民間美術教育運動

B, 理念（目的）と方法（型）の分離

・受容、定着に伴う軌轍（地域に積み上げられた意識、文化による透過機能）

・和魂洋才の系譜 「型」の文化（芸道 伝統文化教育）「磨き」の構造

* 戦後大阪におけるコーナー式教育<ソネメトード>の経緯（曾根靖雄、大正自由教育<木下竹次>奈良学習、ダルトンプラン、選択方式）

2, 大阪図画の系譜

A, 一本線描法

・大阪プラグマチズム（芸道教育、型の文化、地域に根ざす）大阪図画

教育美術振興会の啓蒙活動（石原正徳、外商）西日本連盟の成立 高妻巳子雄

・山本 鼎の自由画と実相主義の流れ「実相に観入して、自然・自己一元化の生を写す」（斎藤茂吉）

B, 教条化（メトード）、活性化

・作品（結果）主義 教条化（マニュアル化）

・再理念化 一本線描法～一本線（禅の思念導入、集中性理論、乾一雄、西元保）

・90年代 「DO」の活動につなぐ（造形遊び）

以上は今回の奈良での美術科教育学会、美術教育史部会での発表予定の骨子です。今回学会発祥地の地で開かれるというので、発足に参加した証人の一人としても、何かやってみたいという気持ちで、お声を戴いたのを幸いに、老骨に鞭打って申し込みましたが、果たして少しでも御役に立つかどうか？

この骨子は、実は私が地元で関係していました現場の研修会での講話要旨ですが、今80歳を過ぎて改めて自分のやってきた道を振り返って、教員養成に関わりながら、地方というか地元の教育現場の研究会にずっとかかわってきて、私なりに学会と教育現場との関係というか、交流に留意してきた積もりです。その経験を通して、両者の関係問題というより、現場教育、各地で展開されてこられた研究組織との問題意識なりを述べてみたいと思います。これを機に現場研究なり教材研究の研究というか、学会での検討の一つの資料に成ればと願う次第です。

1) 地域研究の意味

・大阪教育大で、大学院開設に伴う準備として、至急アメリカに在外研究として出向いたおり（学会通信83号、奈良

学会開催への挨拶文参照）、碩学バイテル教授から、外（海外）より足許（地元）の研究を始めてはという示唆を受け、それまで余り深くは入らなかった地元の教育現場へのリサーチを始めた。当時周辺にあった一本線描法とソネメトードが、考察の対象であった。一本線はアメリカの研究者には、興味を持たれたのは、やはり東洋の画法があった事と思う。[Outline Drawing] 向こうでは、大学の研究室を核に地域（教育現場）の研究組織が有って、教材から指導法まで関わっているように見えたが、わが国のような積重ねた伝統なり、厚い層を持ったそれぞれの地域に置ける現場教育の研究組織を見なれたものは、比較文化だけでなく、両者のあり方では今後の展開としても興味深い。

・戦後我々が学習した美術教育の啓蒙書（全集、講座）では、わが国の美術教育の歴史は、おしなべて欧米の理念、方法論の移入史で有り、従って変化のそれであったように思う。例えば創造主義から造形主義、認識主義へといった移入なり変化の経緯の流れであるそうした理念なり普遍的な流れとは別に我々の廻りで動いている現場の研究なり教育の姿、動きは、もう一つ違った形であるのではないかという素朴な疑問である。現場では、その地域で積重ねられた意識の中で継続されている指導法（時には理念化されている）が実際に教材化され、研究対象になっている。そうした現実を見て行くと、教育史をというか、系譜、流れを二つの軸で見て行かねばならないのではと思う。

2) 文化意識の問題

・幸い私の周辺と言うか地域では、大阪図画という戦後の美術教育の大きな啓蒙活動を展開した組織なり、実践活動が有る。実際私もその組織で活動し、片方で研究者の一員として見てきたつもりでもある。地域教育を抱えているものは、やはりそれは「文化」であると思う。それは地域文化に繋がるものでもあり、逆に土着した意識でもあるから、かえって日本文化そのものの意識にもつながって行く。戦後大阪で行政として施行されたコーナー式が、個性化、差異化より、保障化を願った教育現場の『和』の文化意識から消滅した反面例を挙げるまでもなく、今日に至る題材や設定授業の定着度は大きい。

・和魂洋才という言葉も我々の文化は、外来文化の習合である。内陸化し土着して行く課程の中で定着して行く。反自由、国粹で取られがちな一本線が、山本鼎の自由画に繋がるのも、その一環でもある。文化許容の問題としても興味深い。方法と目的、手段と理念の分離は、伝統的な芸道教育に裏打ちされるように、有効な啓蒙活動として磨きの行動で教条化される。一本線の指導法にある「型」の問題も「型から精神へ」といった意識につながっている。こうした構造は批判するのは優しい。しかしそこにある土着した文化意識に眼を届かせない限り、地域なり現場との交流は一体化されないような気がする。地域教育の研究は、やはり文化意識の考察を欠かせないと思う。我が国に根付いた教育現場の文化意識でもある。

新刊紹介

From Child Art to Visual Language of Youth: 児童美術から青年期の視覚言語へ

New Models and Tools for Assessment of Learning and Creation in Art Education
美術教育における学習や制作の評価のための新しいモデルとツール

Edited by Andrea Kaprpati and Emil Gaul
Published by Intellect Ltd, UK, 2013

岡崎昭夫 (筑波大学)

2011年6月にハンガリーの首都ブダペストで第33回国際美術教育学会 (InSEA) が開催されたが、その直前のプレリサーチ会議は美術教育における評価を主題としていた。本書はそこで発表された欧米や日本の諸国の研究をハンガリーの研究者の二人が収録して編集したものである。

美術教育における評価の国際的な視野からの研究書としてはアイスナー等による編著作 (*Evaluation and Assessment of Visual Arts Education: International Perspectives*, Teachers College Press, 1996) があるが、これも国際美術教育学会 (InSEA) によるリサーチ会議の成果である。その17年後に出版された本書の目的は、美術教育者や教育行政の関係者に対して、評価への興味や関心を喚起することにある。

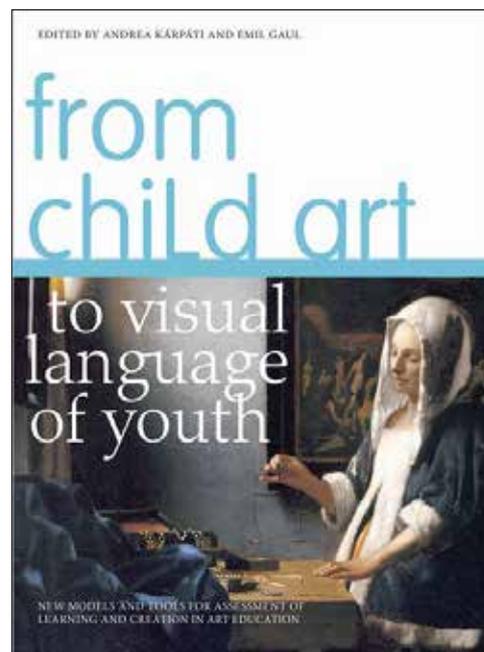
本書では、子どもの美術、指導計画、カリキュラム開発、視覚的読み書き、美的判断、視覚文化、政策的提言、文化的伝統と革新という観点から、評価に関して様々な研究成果が示されている。分担執筆者は、アメリカ、イギリス、フランス、ハンガリー、トルコ、オランダ、フィンランド、ドイツ、スイス、日本、ポルトガルの研究者で、本書により国際的な視野から美術教育における評価を俯瞰することができる。

本書は、全282頁の分量で、3部14章で構成され、6歳から18歳までの美術技能における評価研究を概観し、美術教育における新しい評価の実践事例を検討し、評価方法に関する近年の研究成果を提示している。

編著者の「序文」の解説によると、まず第1部「美術における評価の歴史と今日的視点：全国的規模の諸研究」は欧米各国の評価に関する報告で、第1～5章がそれにあたる。

第1章「アメリカにおける美術の評価の現状」では、アメリカ美術教育における評価の歴史を概括し、単純な描画テストから電子ファイルのポートフォリオへ、視覚技能への焦点から制作過程の記録へ、という評価方式の変遷を概観している。

第2章「イギリスにおける美術・デザインの評価：中等教育修了資格試験」では、教育評価における総括的評価と形成的評価が相乗効果を産んだ事例として、生徒が17歳前後の時期に受けるペーパーテストとコースワーク (課題レポート作成) による中等教育修了資格試験 (GCSE) を紹介し、現場教員が主体的役割を果たしているこのシステムが美術教育の実践を持続的に支えていることを提示している。



アマゾン価格
ハードカバー
約7,000円
Kindle版
約2,000円

第3章「美術文化の教育から生活技術へ：2010年フランスの現状の評価」では、トップダウンから制度化されたエリートの特徴を持つフランスの教育において、急速に発展する現代の電子メディア社会が教育の目的や内容の再検討をせまり、教育の大衆化によってエリートの教養教育としての美術文化の教育が生活技術の学習に転換している現状を報告している。

第4章「ハンガリーにおける視覚技能の評価の研究」では、1996年から美術やデザインの教科として導入された「視覚文化」におけるポートフォリオ評価や、青年期のサブカルチャーの表現や視覚言語の使用に関する課題評価に基づいて、絵画のみではなく複合的なメディアという多角的な観点からの児童美術の発達のモデルを提供している。

第5章「パフォーマンス評価方法を用いる美術教員の能力：トルコの事例」では、小学校の美術の専科教員に対する調査研究の結果から、教員はパフォーマンス評価に日常的に従事しているが、ポートフォリオの準備・評価・保管に時間をかけることが困難で、評価基準としての「ルーブリック」が学校の個々の現実に適合しておらず、美術教育における評価分野の専門家による指導・助言が必要であると述べている。

本書の第2部「新しい評価の実践」では、制作・鑑賞・批評の能力の評価という古い方法ではなく、新しい評価方法を開発する欧米各国の事例が検討されており、第6～10章がそれにあたる。

第6章「美術におけるパフォーマンスの評価：何をどのようになぜ」では、形成的評価よりも総括的評価のほうが生徒の学習にどれほど効果的かを示し、「国際バカロレア資格試験」(IB)の美術の評価モデルが様々な文化的相違を超えて適用できることをアメリカの事例と比較しながら示している。

第7章「美術教育における発達の自己評価」では、オランダの事例を通して前章とは反対に形成的評価方法が生徒と教員の協同による学習過程には不可欠であることを指摘し、最終の作品とともに制作過程でのフィードバック(感想や意見、途中の評価)を繰り返すような「構成主義」の学習理論(「状況的学習論」)に基づき、新しい知識を構成する場合には生徒の体験が中心的役割を果たすことを主張している。

第8章「美術教育における視覚的知識の評価」では、21世紀の高度情報科学の世界における個人を超えた集合的知識社会の現状を前提に、教育課程における評価の役割とは「視覚文化」を再創造してゆく生徒の成長を明らかにすることであり、制作や鑑賞の個人のプロセスではなく、アメリカの事例を通して「実践コミュニティ」のようにグループの論評により評価される集合的な認知の重要性を喚起している。

第9章「フィンランドの総合学校における美術学習の成果に関する全国的調査2010」では、フィンランドが国際学力調査で常に上位に位置してきたが、文部省によって全ての教科の全国学力調査が継続的になされており、その2010年度の中等教育における鉛筆描画テストと制作課題の二つで構成された美術分野の学力調査の結果、生徒の3分の1が視覚的スキルや能力が低い段階にあることが明らかとなり、現場の授業を改善する契機になったことを報告している。

第10章「美術における能力評価をどのようにするか?」では、コンピテンシーという能力に基づく授業や学習に評価が深く関係していることから、美術のみが伸ばせるスキルや能力に注目し、欧州の国々の全国的調査を参考にして評価開発に役立つ能力モデルの枠組みをドイツで作成し、近い将来には視覚能力の欧州共通の指針を策定しようとしていることを述べている。

本書の第3部「学校内外における評価に関する研究パラダイム」では、評価内容や評価の役割に関して参考となるような既成のモデルや研究成果が示されており、第11章～14章がそれにあたる。

第11章「オランダでのUカーブ：美術の視覚的発達の文化的差異」では、ガードナー等による研究の成果である視覚的発達の「Uカーブ」モデル(青年期における視覚的能力の低下)をオランダで追試し、いろいろな国々の様々な年齢の人々(5・8・11・14歳の子供も、成人、美術家)による作品群を文化的基盤の違う美術家や美術教育者が判定した結果、美術教育

における発達の図式は評価者の文化的基盤に強く関係していることを見出している。

第12章「美術における主題処理の能力」では、美術的能力の基礎となる空間的視覚能力に関するスイスでの研究を報告しており、描画・作画過程・インタビューの三つを記録したビデオテープを基に「グラウンデッド・セオリー」(GT)という質的調査手法で分析した結果、認知発達段階による評価よりも、主題処理能力を中心とする発達方略の評価が重要であると述べている。

第13章「美術に関する文章作成過程へのメタ認知の影響に関する考察」では、美術に関する文章を作成する過程でのメタ認知の影響を評価するため、日本の大学生の被験者を対象とした実験を通してメタ認知と鑑賞技能との間の相関関係を考察しており、鑑賞技能を向上させる指導を繰り返し受けると美術作品に関してより優れた分析ができるようになることを実証し、授業改善に直接的に役立つ能力評価の事例を提供している。

第14章「生徒と教員にとって意味ある視覚的リテラシーの研究」では、ポルトガルにおける生徒と教員が理解している視覚的リテラシーに関する研究を報告しており、美術の制作や鑑賞における語りが分析されて、制作過程における発想・構想・感情表現を評価する必要性や、視覚的リテラシーの発達における学校の役割の重要性を指摘している。

総じて本書には、単純な描画テストや筆記試験による評価から、現実的な課題への取り組みを評価するという「真正の評価」(authentic evaluation)へと向かうグローバルな変化が認められる。

そうした評価の中で、「ポートフォリオ評価」は美術で形成的評価を行う上で適した方法であり、評価基準としての「ルーブリック」を使用した「パフォーマンスの評価」は、アメリカの最近の美術の教科書『美術の探究』(*Explorations in Art*, Davis Publications, 2008)で全面的に適用されており、国内でも図工や美術の授業で試行されつつある(香川大学教育学部付属高松小学校『活用する力を育てるパフォーマンス評価』明治図書2010年、西岡加名恵・田中耕治共編『活用する力を育てる授業と評価 中学校』学事出版2009年参照)。

こうした評価方法に関心のある方は、本書でも記述されているアメリカ美術教育における評価、イギリスにおける「中等教育修了資格試験」(GCSE)、「国際バカロレア資格試験」(IB)に関する論説を掲載している『教育美術』誌の特集号「美術のアセスメントを授業に生かす」(2013年7月号)や、本書の第13章を執筆している石崎和宏・王文純両氏が本学会誌『美術教育学』に掲載している論考「美術学習におけるメタ認知の役割に関する一考察」(2010年)が大いに参考となるだろう。以上のように本書は、「国際的な基準に基づく評価が視覚的スキルやその発達に関する知識に寄与すると信じる人々」に向けて書かれたもので、「継続的な評価が美術教育を進展させる」ことを「序文」の最後で編著者は強調している。

本部事務局より

■学会奈良大会の総会での委任状について

次回総会は、第36回美術科教育学会奈良大会の2日目、2014年3月29日(土)の午前9時より開催予定です。会則で定めていますように、総会は、学会の事業及び運営に関する重要事項を審議決定する学会の最高議決機関であり、会員の5分の1以上(委任状を含む)の出席がなければ成立しません。やむを得ない事情で総会に欠席される方は、同封の委任状(官製はがきに印刷されたもの)に必要な事項を記入、押印の上、3月19日(水)までに投函してください。

■会費納入関連 2014年会計年度の会費納入をお願いします

学会運営は、会員の皆様の会費により運営されています。2014年会計年度は1月より12月までですが、2014年8月の理事会にて会員名簿の報告・承認をしますので、7月31日までに納入いただくようお願いいたします。また、2013年会計年度までの学会費未納の方は、至急の全額納入をお願い致します。皆様の会費により学会誌刊行、3月の大会運営、地区会などの運営が行なわれています。

学会通信送付時の封筒宛名ラベルに、各会員の皆様の納入していただく金額を示してありますので、ご参照ください。通常は「8000」、納入完了の場合「0」、複数年度未納の場合は「16000」等、多く払い過ぎていた場合はマイナスで「-8000」等と表記しています。

注意事項

学会誌次号36号への投稿並びに次回第37回大会での口頭発表に際しては、申込みの時点で以下の2つの条件を満たしている必要があります。

①会員登録をしていること

②当該年度(2014年会計年度)までの年会費を全て納入済みであること

学会誌への投稿申し込みは2014年7月末、大会での口頭発表申し込みはおおよそ2014年12月初旬です。十分にご注意下さい。

*会費を2年間滞納した場合は、会員資格を失います。

会費振り込み口座名、番号

郵便局にある払込用紙、または銀行等からの振替により、下記あてに納入してください。

銀行名：ゆうちょ銀行

口座記号番号：00990-5-202125

口座名称：美術科教育学会本部事務局

通信欄には、「2013年度会費」等、会費の年度をご記入ください。

年会費：正会員 8,000円 賛助会員 20,000円

なお、ゆうちょ銀行以外の銀行からの振込の受取口座として利用される場合は下記内容を指定してください。

店名(店番)：〇九九(ゼロキユウキユウ)店(099)

預金種目：当座

口座番号：0202125 (宇田、竹内)

大学院生等への会費減額措置(申請は毎年必要です)

大学院生等は、所定の手続きにより、年会費を半額(4,000円)に減額する措置を受けることができます。会費減額措置を希望する大学院生等は、毎年、5月中旬に各自、申請手続きをすることになっています。申請しない場合は、減額措置を受けられません。詳細は学会ウェブサイトをご参照ください。

http://www.artedu.jp/bbg4um0dy-8/#_8

■2014年3月発行予定学会誌第35号に投稿され、掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様へ

学会誌第35号に投稿された会員の皆様、執筆お疲れ様でした。掲載が許可された後、掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様にお知らせ致します。公費払いとは、大学研究費や科学研究費補助金などで支払うことをさしています。

掲載負担金の請求は、掲載ページ数が確定した時点(3月初旬を予定)でお伝えします。請求書にしたがってお振込みください。ただし、各所属先が求める形式で請求書類を別途用意しなくてはならない場合は、そこから本部事務局と相談・交渉し始めたのでは、手続きが間にあわないことがあります。以下の留意点を読み、各所属先で前もってご確認いただき、相談・交渉するなど今から準備を始めて下さい。

留意事項

- 1 原則として、必要な書類は、投稿者自身で作成いただき、書類等に捺印が必要な場合は、事務局までお送りください。作成いただく書類は、本部事務局からの「振込負担金請求書」以外の書類全となりません。
- 2 投稿者自身による「立替払い」を原則と致します。
- 3 上記1, 2を原則としますが、大学事務局と本部事務局が直接やり取りをしなければいけないケースがあります。この場合には、以下まで、手続きの概要、事務担当者の連絡先などをメールで知らせて下さい。

〒640-8510 和歌山市栄谷930 和歌山大学教育学部

美術科教育学会本部事務局 会員登録・庶務担当

丁子かおる kchoji@center.wakayama-u.ac.jp

迅速な手続きのため、ご確認及びご準備について、ご協力をよろしくお願い致します。(丁子)

美術科教育学会 本部事務局

■和歌山大学 〒640-8510 和歌山市栄谷930 和歌山大学教育学部

永守基樹(代表理事) nagamori@center.wakayama-u.ac.jp TEL 073-457-7508

丁子かおる(庶務・会員登録) kchoji@center.wakayama-u.ac.jp TEL 073-457-7509

■奈良教育大学 〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学教育学部

宇田秀士(総務担当副代表理事/本部事務局長/会費納入・会計・総務全般) udah@nara-edu.ac.jp TEL 0742-27-9223

竹内晋平(会費納入・会計・総務全般) shimpei@nara-edu.ac.jp TEL 0742-27-9038

■三重大学 〒514-8507 津市栗真町屋1577 三重大学教育学部

上山浩(ウェブ) ueyama@edu.mie-u.ac.jp TEL 059-231-9280

■大阪教育大学 〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1 大阪教育大学美術教育講座

佐藤賢司(学会通信) ksato@cc.osaka-kyoiku.ac.jp TEL 072-978-3732

渡邊美香(学会通信/本部事務局運営委員) mwatanab@cc.osaka-kyoiku.ac.jp TEL 072-978-3736